「森銑三刈谷の会」だより　No.１７

発行　2023年2月25日（月刊・メールでの投稿歓迎）　　バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
例会　第 3 土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由　　共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.

第17回（2023/1/21）随筆『羽鳥千尋』を読む　　参加15人

表「羽鳥千尋」関連年譜　　◆羽鳥千尋、★森銑三、※森鷗外、◎都築甚之助

西暦	元号	事　　項
1907	明治40	◆10/24　脊椎カリエスで高崎市綿貫病院に入院。
1908	明治41	◆2/1 発行『ホトトギス』に「菊月の一日」（春鳥城）掲載。
		◆独学で医術開業試験のため受験勉強に専念。
1910	明治43	★東京築地の工手学校予科入学。
		◆後期実地試験のために鷗外に助けを求め長文の手紙を出す。
		※鷗外、千尋に陸軍軍医学校防疫部を斡旋。◆千尋、上京。
		◎都築甚之助、東京市外荻窪に私立脚気研究所設立。
		◆2年間（1910-1912）職務に勉励しながら後期実地試験準備。
1911	明治44	★工手学校予科卒業、重い脚気で都築療養園に入院。帰郷。
1912	明治45 大正元	◆6/21　千尋死去。
		※鷗外、『中央公論』八月号に「羽鳥千尋」発表。 ★銑三、郷里で「羽鳥千尋」を読む。

鷗外には、病気や貧困、恵まれない境遇に苦しみつつ、誠実に努力する若き人々を温かい目で描く作品群がある（参考：山崎一穎『森鷗外』）。「羽鳥千尋」もその一つである。東大医学部出身でない都築の才能を認め、研究の機会を与えたことも、鷗外の温かい眼差しといえるのではないか。今回羽鳥千尋を知ることにより、鷗外・都築・銑三という関係性に新しい要素が加えられた。今後、銑三の鷗外観に更に焦点をあてていきたい。

森銑三と「羽鳥千尋」　　神谷磨利子

森銑三「羽鳥千尋」（初出『ももんが』1963/3）は森鷗外「羽鳥千尋」（初出『中央公論』1912/8）について銑三の感懐をまとめた作品である。鷗外の作品は、羽鳥千尋（1887-1912）からの長文の手紙を元に書かれている。千尋は 11 歳の時に軍医だった父親が病死した後、近親者の債務問題、自身の発病と続く困難の中で、独学で医術開業を目指し努力する。鷗外に紹介を頼み 1910-12 年、陸軍軍医学校防疫部（『鷗外全集』月報 20 田中隆尚）で働きながら勉学に励んだが、最後の実地試験を前に病死する。千尋の手紙には、郷里で入院時の紀行文「菊月の一日」（『ホトトギス』1908/2）が転載されている。

本会では以前に銑三の「入院」（初出『研』1936/4）を読み合わせた（2022/8「森銑三刈谷の会」だより No.12）。千尋が東京で試験準備をしていた 1911 年、銑三は工手学校予科を卒業したが重篤な衝心に近い脚気で、同郷の都築甚之助の設立した脚気研究所療養園に入院し、一命を取り止めた（森三郎の言）。「菊月の一日」と「入院」の状況は酷似している。1912 年刈谷で療養中の銑三は、今は亡き羽鳥千尋に「いふべからざる親近感」を抱く。その後、代用教員の職を得て高崎に行った時、鷗外の弟・森潤三郎に出会った時、古い『ホトトギス』に千尋の投書を見つけた時、『ももんが』の編集者・田中隆尚の記事に千尋の名を見つけた時と、銑三は「羽鳥千尋」の名と巡り会う度に、懐かしさをかみしめている。

当日は鈴木竹志氏より、銑三が『ももんが』同人になったいきさつなどの説明をしていただいた。鈴木氏には森銑三についての講演「読書の達人」（2005.6.28 刈谷図書館協会記念講演）がある（小林俊雄拾葉『刈谷ゆかりの人物　拾葉レファレンス』2016, pp.417-424）。

「随筆『羽鳥千尋』を読む」に参加して　　鈴木哲

「随筆『羽鳥千尋』を読む」は興味深かった。森鷗外(1912)「羽鳥千尋」と森銑三(1963)「羽鳥千尋(一つの自伝)」は紛らわしいが同題である。群馬郡瀧川村板井の羽鳥(1887-1912)は 1910 年鷗外(1862-1922)に援助依頼の手紙をしたため、役所を斡旋されるが、2 年後病を得て 25 歳で死去する。鷗外(1912)はこの顛末で、全体の 9 割を羽鳥書簡が占める。17 歳の銑三(1895-1985)は『中央公論』(1912/8)掲載を「身につまされて読んだ」(銑三, 1963)。当時、築地工手学校予科卒業後脚気を患い、刈谷に帰郷していた。銑三(1963)「羽鳥千尋」は半世紀後の回想である。

羽鳥は高山樗牛(1871-1902, 没 31)を愛読していた。銑三は羽鳥に共鳴し、『ももんが』(c.1957)で羽鳥の名を見て「電気で打たれた」ように感じる。銑三(1963)に鷗外の短編小説の内で何を取るかと問われるなら言下に「羽鳥千尋」と答えよう、学生たち(早稲田)は誰一人として「羽鳥千尋」を知らなかった、との述懐がある。「勿論『鷗外全集』はまだ出てゐず」が意外で、調べると刊行は 1923-27 年、銑三高崎時代 1920-22 年の直後であった。1923 年妹よしが 25 歳で、1932 年弟次郎が死去している。鷗外・羽鳥・銑三の伝記に思いをはせ「羽鳥千尋」を読んだのは刈谷の会が初めてであったかもしれない。

今後予定
2023/2/25（第４土）市立名古屋図書館時代　その２
　　神谷磨利子　名古屋図書館児童室の森銑三
2023/3/18（土）前川芳久　村上文庫の随筆書は楽しい